【小学校・中学校・義務教育学校用】

令和５年度学校評価 結果・学校関係者評価

達成度（評価）
Ａ：十分達成できている
Ｂ：おおむね達成できている
Ｃ：やや不十分である
Ｄ：不十分である

学校名	佐賀市立西川副小

1　前年度 評価結果の概要	**・本校の課題であった低学力、４年間にわたり地道に取り組んできた学力向上へ向けた授業改善、家庭学習の定着、授業での立腰などの成果が県全国の学習状況調査結果から改善が見られるようになった。 ・本校が心の教育の中心として継続して取り組んでいる、人権同和教育、異学年による縦割り班活動等、人権教育の視点と集団を育てる活動等によって、問題行動やいじめ等の問題が減少してきている。 ・地域と連携した学年行事等をコロナ禍も工夫を重ね取り組んできたことで、郷土を愛する児童を育むことができている。**
2　学校教育目標	**「よく学び、助け合う、元気な子の育成　　～かしこく、やさしく、たくましく、笑顔輝く西っ子～」**
3　本年度の重点目標	**・算数科において授業改善に取り組み、主体的な態度、思考・判断・表現力を育む授業づくりに全職員で取り組む。 ・人権・同和教育、道徳科、開発的な生徒指導によって、いじめのない学校づくりに取り組む。 ・地域や保護者との連携を図りながら、体験活動を通して川副町を愛する児童の育成に取り組む。**

4　重点取組内容・成果指標　　**5　最終評価**

（1）共通評価項目

重点取組			具体的取組	最終評価		学校関係者評価		主な担当者
評価項目	取組内容	成果指標 （数値目標）		達成度 （評価）	実施結果	評価	意見や提言	
●学力の向上	○全職員による共通理解と共通実践・学習内容の定着に向けた分かりやすい授業の実践	○校内研究を通して授業の改善を図る。児童アンケートで「粘り強く学習に取組んでいる」に肯定的に回答する児童95%以上。 ・職員アンケートで「学力向上のために授業を工夫する」に肯定的に回答する職員75%以上。	・校内研究において授業評価を実施する。 ・校内研究において児童評価を実施する。 ・年3回、児童アンケートを実施し、結果の分析を行い、改善を図る。	A	・児童アンケートで「粘り強く学習に取組んでいる」に肯定的に回答する児童93%という結果になっていた。 ・職員アンケートで「学力向上のために授業を工夫する」に肯定的に回答する職員100%という結果になっており、すべての職員が授業づくりに取り組むことができていた。 ・学習に主体的に取り組む児童が多くなってきた。また、全員参加型の授業づくりに取り組んだことで、学習時に自分の考えを表現することに対しても意欲的に取り組む児童の姿がよくみられていた。 ・思考力・判断力・表現力を育む授業を実践している教員は、「よくできる・できる」合わせて66%だったので、今後の課題といえる。	A	・授業参観を通して、毎回、先生方が子どもたちの興味をもつ授業づくりをされていると感じる。興味は学習意欲につながるので、これからも工夫を続けてほしい。 ・学力向上と同様に社会性を身に付けることも大事。得意科目を作って伸ばすのはよいと思う。 ・「粘り強く学習に取り組んでいる」との児童評価での9割の児童が肯定的に回答したことは素晴らしいと思う。しかし、先生方はまだ満足しておられないようでさらに取り組みを続けていかれることと思う。 ・学習に対する意欲や取り組む姿勢は向上しているが、理解の方はどうだろうか。「学習がよく分かる」というアンケートはとられているのか。 ・先生方の授業づくりが子どもたちの意欲につながっている。・教師の教材工夫により児童の学ぶ意欲につながったと思う。 ・先生方の自己評価は厳しめなのかもしれないが、半数が改善の余地があるとされているので、今後の取り組みに期待したい。	学校づくり推進委員会 学び部
	○学習規律の徹底 ○算数科における学力の向上 ○授業の改善	○児童アンケートで「姿勢良く授業に取り組んでいる」に肯定的に回答する児童90%以上。 ○1～4年CRTテスト全国平均以上。市販テストで習熟度90%以上。	・児童への意識付けをする重点週間を設ける。 ・計算ドリルや算数スキル等の教材や家庭学習プリントの誤答はできるまで書き直し、やり直しを徹底するようにする。	B	・児童評価では、90%の児童が「姿勢良く授業に取り組んでいる」に肯定的に回答した。前回と比較し、大きな伸びは見られなかったが、年間を通して9割前後の推移である。「西っ子学習レベルアップ週間」を設け、全職員が共通理解をしながら指導を進めることができ、児童への意識付けもできた。	B	・学力の向上について先生方は頑張っていると感じるが、もっと家庭の協力と理解が必要だと思う。 ・一つの教科に絞って向上を図る。得意教科ができると全体の伸びにつながる。・学習時の姿勢については向上している。・授業のはじめの立腰が、授業中のよい姿勢につながっている。 ・学習規律については教師の温度差を感じる、共通理解のもと実践してほしい。	学校づくり推進委員会 学び部
●心の教育	●児童生徒が、自他の生命を尊重する心、他者への思いやりや社会性、倫理観や正義感、感動する心など、豊かな心を身に付ける教育活動	○年3回児童アンケート実施し、肯定的な回答をした児童85%以上。	・児童アンケートを実施し、その結果を全職員で分析し共通理解を深め、教育活動に生かしていく。	B	・「友達と仲良く学校生活をおくっているか」について肯定的な回答をした児童は81%まで向上したが、「友達にさんづけやぼかぼか言葉使いをしている児童は43%とやや低下した。模範となる言葉遣いをしている児童を積極的に称賛するなど、モデルとなる手立てを考えて全体で取り組む必要がある。	A	・「ほめて育てる」は児童の心を豊かにし落ち着きのある学校生活を送ることができると思う。これからも続けてほしい。・個の存在を認めることが心の安全につながる。きらりシールはよいと思う。 ・心の変容を図るには長い時間がかかると思います。・心を育てる手立ての一つにJRC活動をされたらよい。・ぼかぼか言葉については、家庭内での言葉かけが関係しているのではないかと思う。家庭と連携して、まずは大人から子供たちが嫌いなるような、意欲が増すような言葉かけをしていきたい。	【こころ部】
	●いじめの早期発見、早期対応に向けた取組の充実	○いじめ防止等（いじめの定義、いじめの防止等のための取組、事案対処等）について組織的対応ができていると回答した教員90%(3学期実施）以上。	・いじめの対応についての研修・会議を年間に2回行う。 ・月1回の生活アンケートの実施 ・月1回の生徒指導に関する情報交換会の実施	A	・生活アンケート及びいじめアンケートを実施し、いじめ等の早期発見・解決に取り組むことができた。 ・生・特・教協議会では、学校生活面の課題を出し合って早期解決を図ったり、これまでに起きた事案を基に未然防止策を練って友達関係上の問題が起きないように配慮したりできた。	B	・子どもたち自身がもっと、いじめに対する理解をもつことが必要だと感じる。いじめ防止をいろいろな方向から考え、対応し、子どもたちの心の成長の手助けをしてほしい。・いじめについては、ずっとしてはいけない」と言い続けなければならない。 ・職員間の共通理解や関係機関との連携についての学びがいじめの早期発見・解決につながっているのだと思う。今後も子どもたちがいじめのない楽しい学校生活が送れるよう、あらゆる面からコミュニケーションを図っていただけたらと思う。	【こころ部】
	●◎児童生徒が夢や目標を持ち、その実現に向けて意欲的に取り組もうとするための教育活動	●「先生はあなたのよいところを認めてくれていると思う」と回答した児童85%以上 ●◎「将来の夢や目標を持っている」について肯定的な回答をした児童85%以上。 ◎「自分が住む佐賀が好き」と肯定的な回答をした児童85%以上。	・地域や保護者と連携した学校行事や学年行事の実施。 ・生活科や総合的な学習、各教科での単元学習の中での取り組み。 ・各種体験活動では、児童に活動の見通しと学びの振り返りを行う活動を仕組む。	A	・「将来の夢や目標を持っている」について肯定的な回答をした児童生徒は86%、「自分が住む佐賀が好き」と肯定的な回答をした児童は91%と、どちらも、目標とする数値に到達していた。生活科、総合的な学習など他教科と関連させながら継続的に指導してきた結果、児童の意識が高まったと考えられる。	A	・地域と連携した学年行事が実施され「川副町愛」が育っていると感じる。 ・目標や夢をもつのはロールモデルが一番。地域の夢をもつ大人との関わりの場をもっと増やしてもらいたい。 ・地域の産業や身近な人の仕事に触れながら、自己の将来像を想像できるような取り組みとなっているのだろう。高学年には佐賀で暮らす利点にも目を向けて学習を深めていかれたらよい。 ・夢や目標をもつことはとてもよいこと。佐賀が好きな児童の割合が高いが、西川副も好きになってほしい。	【からだ部】
●健康・体つくり	●安全に関する資質・能力の育成 ●望ましい生活習慣の形成	●児童の交通事故を0（ゼロ）にする。 ○「交通安全に気を付けている。」と回答した児童が85%以上。 ●規則正しい生活習慣「早寝早起」の啓発・推進をする。 ○「早寝早起ができている」と回答した児童が85%以上。	・5月に交通安全教室を実施する。 ・全校朝会、学年朝会、集会活動などの場で、必要に応じて交通安全に関する啓発を行う。 ・下校時の職員による見回りの実施（月に1回程度、特別校時の時等） ・家庭学習がんばろう週間での啓発をする。 ・保健便りや生活のきまり、全校・学年集会等での啓発に取組む。	A	・全校朝会・学年集会・集会活動などの場で、適宜交通安全に関する啓発を行った。実際に今年度交通事故0を継続することができた。 ・特別校時の際には職員による見回りを行い、下校指導を行った。 ・家庭学習がんばろう週間において、早寝・早起きを点検項目として取りよげ、意識化を図った。学校生活アンケートでは、89%の児童が「早寝・早起きできている」95%の児童が「朝ご飯を食べて登校している」と回答し、良い生活習慣づくりができている。	A	・ヘルメットの着用ができていない子どもたちを見かけることが多くなってきた。交通安全教室などの学習をいかし、交通安全マナーを子どもたちに身に付けて欲しい。 ・交通安全は命に関わることであり、家庭での教育が一番大事だが、学校とも連携をしていきたいところ。 ・交通安全については校外のことが中心になるので学校だけでは不十分。交通指導員をはじめ、外部の組織を活用することが大切。また、家庭や地域の見守りや助言も必要だと思う。 ・早寝早起きは、学習習慣・意欲にも深く関係するため、今後は「できていない」児童の家庭環境や生活の背景を考慮しつつ、改善に向かうような取り組みを期待する。	【からだ部】
	○防災に対する児童の意識の向上と対応能力の育成	○災害時等で自分の命を守る行動や判断ができるようにする。 ・「災害時に命を守る行動や判断ができる」と回答した児童85%以上。	・各教科や特別活動などをが学習の中で防災教育を実施する。 ・年間を通しての避難訓練等の実施、講師による講演等を通して意識を高める。	A	・4・5・6年生は、総合的な学習の一環として自身の命について学習する内容に取り組み、改めて命の大切さについて学びを深めることができた。また年間を通しての避難訓練等を実施した。学校生活アンケートによる「自分の命を守る行動ができる」と回答した児童は97%だった。・一斉下校では、職員が児童に帯同し、危険個所の点検を行った。	A	・防災訓練を何度も実施されているので、子どもたちは災害時、自分がどう行動するのか身に付けてきていると感じる。・災害はいつどこで、発生するか分からない。訓練が一番大事だと思う。 ・白赤には防災教育資料や就災地の写真パネル等もある。白赤の県支部から講師を呼ぶなど活用されたらよい。・より実際に即した取り組みとなるよう、外部講師の招へいや地域連携を深めていくとよい。親子でボリ袋調理や投ボールペットの体験等・乾電半鳥冲地震を教訓に、学校での訓練を怠らず、地域や家庭でも自分の身を守ることができるように日頃を訓練を行ってほしい。	【からだ部】
●業務改善・教職員の働き方改革の推進	●業務効率化の推進と時間外勤務時間の削減	●教育委員会規則に掲げる時間外在校等時間の上限を遵守する。	・教育委員会規則に掲げる時間外在校等時間の上限を遵守する。 ・業務改善について話し合う時間を前期、後期で設定する。	B	・超過勤務時間の平均が一人当たり約32時間であり、昨年並みである。職員の長期の休みが続いたがチームで対応することができた。 ・会議や学期末の繁忙期に水曜校時等で対応することで、時間外勤務の減少や業務負担の軽減につながった。 ・学年グループや専門部等での協働、個人目標設定での意識化、留守番電話の活用などが効果的であった。	B	・教職員の多忙化は、子どもの教育にとってはマイナスだと思う。本来業務以外は地域の力を借りる仕組みを作るなど、体制構築が必要だと思う。 ・業務改善に効果的な取り組みは、全校的に実践して、先生方の心身の健康保持・増進に努めてほしい。 ・個人目標の設定や全体での意識化を図り、超過勤務時間の減少をされ、協働の成果も表れているようだ。	・管理職
	○働きやすい職場環境づくりの促進	○職員の声を生かしながら働きやすい職場環境づくりに取り組む。	・学期ごとに職場アンケート（毎学期）を実施する。 ・職場環境満足度90%（3学期実施）を目指す。 ・職員による管理職評価を3学期に実施する。 ・年休がとりやすいように声かけや協力体制を仕組む。	B	・学期ごとに職場アンケートを実施し、学校運営や学校行事、生徒指導、保護者対応、働き方改革等について職員の意見を聞き、改善や共通理解を深めるなどして学校運営にいかすことができた。 ・職員による管理職評価を実施し、紙媒体からデータへの移行の内容や推進部会の在り方等について改善が必要なことが分かった。	A	・教職員アンケート結果に向き合っておられる姿勢を感じた。日本全体が向き合う問題。・経験の浅い先生への声かけ等、コミュニケーションを図って、一人で悩むことのないように配慮をお願いしたい。 ・働きやすい環境づくりやゆとりの時間を増やすことができ、年休取得時間が増えたことはよいと思う。	・管理職

（2）本年度重点的に取り組む独自評価項目

重点取組			具体的取組	最終評価		学校関係者評価		主な担当者
評価項目	重点取組内容	成果指標 （数値目標）		達成度 （評価）	実施結果	評価	意見や提言	
○特別支援教育の充実	○教員の専門性と意識の向上	○特別支援に関する専門性が向上した教員90%（3学期実施）以上。	・特別支援教育に関する研修会や公開授業の実施 ・ケース会議の開催、情報共有 ・SC、SSW、SSFや外部機関の活用による教育相談体制の充実を図る。	B	・特別支援教育に関する専門性が少しでも向上したと答えた教員は95%であった。研修会や特別支援学級の合同公開授業（12月）の成果であると考える。 ・SC,SSW,等の外部機関と連携して支援にあたっているが、情報共有に課題がある。よりよい支援や学級づくりのために、ケース会議や生・特・教協議会等を通して、児童の実態や効果のあった指導方法や支援の仕方等の情報共有を充実させていきたい。	A	・教室を拡張するなど学校としての向上意欲が伺える。引き続き意識の向上に努めていただきたい。 ・支援員の活用や外部機関との連携がとれている。 ・特別支援教育は必要性が高まっているので、特定の担当者だけではなく、今後も全職員の研修や情報共有を継続して専門性を高めてほしい。	【こころ部】 ・特別支援Co ・教育相談担当 ・生徒指導担当

●･･･県共通　○･･･学校独自　◎･･･志を高める教育

5　総合評価・ 次年度への展望	・本校の課題であった低学力。授業改善に取り組んできたところ、「主体的に取り組む力」「粘り強く学習に取り組む力」5・6年国語では「書くこと」についての伸びが見られた。今後は、ICTの効果的な活用や基礎基本の定着にも更に力を入れていきたい。 ・人権・同和教育、道徳の学習、異学年による縦割り班活動、体験活動などをバランスよくちりばめ、心の教育を推進することができた。いじめの早期発見、早期対応に向けて体制の強化や取り組みの見直しなどを行ってきた。今後は、学習のきまりや生活のきまりの指導に職員間の温度差が出ないようにすることで、安心できる学校づくりにつなげていきたい。 ・郷土を愛する児童を育てるため、保護者や地域と連携した行事や学習を多く取り入れている。コロナ前同様の支援を受けられない取り組みも増えたがPTAや公民館、まちづくり協議会、老人会等と連携を取りながら、活動を進めることができた。今後も、コミュニティースクールを視野に入れて取り組んでいく。